

呑川レポート 2014-12

感潮域の実際

----- 増えた小学校の「呑川学習」 -----

6月から7月初めに掛けて、小学校の「呑川学習」「呑川ウォーク」が続き、トータル7回の慌ただしい対応が続きました。今年も、従来より1校増え、4校になり、また3年生・4年生中心だった学習から、5年生対象という新しい経験もしました。



(大森第4小にて 白石さん撮影)

「呑川ウォーク」は、1回に10数人以上の案内人の動員が必要なこともあり、私たちの体制もさらに強化が必要になりました。でも、子どもたちが「呑川」に関心を持ってくれる姿や笑顔に接すると、私たちも大いに励まされます。

----- 始まった西蒲田地域「悪臭ヒヤリング」 -----

「呑川」の西蒲田地域周辺では「悪臭」に困る方々がいます。この問題に取り組むために、「呑川の会」も参加している「呑川ネット」で、住民の方々から実態をお聞きする「悪臭ヒヤリング」が始まりました。

1グループで約100所帯を対象とし、5グループで500所帯にも及ぶ大規模調査です。実際にはお留守の方や、お答えいただけない方も多くいますから、1グループで40世帯、5グループで200世帯くらいのデータが得られればと思っています。



「西蒲田地域」の「呑川」は、こんな風に水が「黄変」することが多く、呑川沿いには民家やマンションが建ち並んでいます。



「ヒヤリング行動」には、長老的存在である館野さんや、大坪さんも参加してくださいました。不慣れな私たちは、一軒一軒おそるおそる訪ねましたが、おおむね好意的に対応してくださった方が多いのは、うれしい限りでした。

第1回調査では、「双流橋」付近から「山野橋」付近までにお住まいの方はかなり「悪臭」に悩み、家の中にも臭いと言われる方も多かったです。それ以外の地域の方は、ほとんど気にしない、気が付かなかった・・と言われる方もいて、地域性や個人差が多いのも感じました。

また、他人からは「良くこんな所にお住まいに・・・」などと言われても、この地域を愛していっしょの方が多く、「とても住みやすい所です」とおっしゃるのを聞くと、こちらもうれしくなります。

つい「どんなところが良いのですか？」と伺うと、「この格好で蒲田に行けますから・・・」ステキで、的を得た、とても良い答えを聞く事が出来ました。

この格好・・・つまり「普段着」で蒲田に日用品の買い物や食事に行けることが、気に入っている第1の要件なのです。キチットおしゃれして行かなければならない銀座や新宿・渋谷などちがった魅力があるのです。蒲田には蒲田の「街づくり」の方向性を感じました。

これから、まだ数次の行動が予定されています。1グループ3名で行動し、5グループ15名が必要です。ぜひ多くの方に参加していただきたく、ご連絡をいただければありがたく思います。

「感潮領域」の実際

「呑川読本」とでも言うべき「呑川は流れる 2004」が発行されてから、早くも10年が経過し、それに伴い、私たちも10才の年令を重ね、「新版・呑川は流れる」を次世代に残すことが課題となっています。

そして、その中味をいかに充実したものにするかが課題で、時代に見合った新鮮で、判りやすく、みんなが知りたいことに応えられるように出来るか・・・ずっと気になっています。

私たちの知っている知識は、子どもの頃から知っていることや、学校で習ったり、経験で得たり、本や新聞、TVなどで得た雑多な知識で埋まっています。それらの知識が、どこから得て、どの文献から知ったなどと明言出来るものは少ないと思います。それは「呑川」に関することでも同じです。たとえば、「呑川の感潮域は”池上橋”まで、普段は水が少ないように見えるが、大潮になればここまで海の水が上がってくる」などと、「呑川ウォーク」では、子どもたちにも大人にも説明します。

しかし、これはどこから得た知識でしょうか？いつの間にか、どこかで覚え、知ったかぶりして教えているのです。そして、ネットで調べても、行政の文書でも、「感潮域は池上橋まで」と表現されています。

しかし、それらをよく見ると、著者が自分で確かめたわけで無く、著者もどこかの誰かが言ったことを、当たり前のように書いているのです。実は「文献」なるものも、そんなことが多いのに気が付きました。

そこで、いろいろのことをあいまいのまま終わらせること無く、「自分たちで調べられることは、実際に現場で調べて見よう…」と、一つ一つ確認する事にしました。

今回は”「感潮域」は、実際どこまでなのか・・・？」に迫ります。



ここは、蒲田の「日本工学院」前を流れる呑川です。夏のこの時期、水がよく「黄変」します。しかし、これを見て、これが「干潮」であるか、「満潮」であるか、すぐ判る方は少ないでしょう。子どもたちや、普通の大人たちにとって、「感潮河川」であることを実感出来る場所は、池上地域、とりわけ本門寺や養源寺付近です。



「干潮」の時間帯になると、両岸に「犬走り」が露出し、水は真ん中の「低水敷」だけを流れます。ところが、「満潮」になると…



海からの潮がここまでやってきて、「犬走り」は水没し、呑川の川幅いっぱいになり水が流れるのです。それは「大潮」でなくても、「小潮」でも「中潮」でも、同じ様子が見られます。ところが、さらに上流の「池上橋」近くでは、干満の差が小さく「感潮」を実感出来ないことが多いのです。

また、面白いことに、小学生の「呑川ウォーク」で、こんな質問を受けました。「満潮のとき、水があふれることは無いんですか…?」「私も、それが心配…」などと、次々に声が上がりました。「満潮」と言う言葉から受けるイメージは、「あふれる」という感じを与えるのですね。こういう時、写真で示してあげる重要性を感じました。

話はそれますが、同じ「満潮」の写真でも、その時と違う季節の写真で示してあげるのも大切だと思うようになりました。



これは、紅葉のピークを過ぎてしまったのですが、同じ場所が秋には違った姿を見せてくれます。ケヤキも桜も、護岸に垂れるツタも紅葉しています。私は、最近増えてきている、多くの河川の「散策ガイド」を時々見ている。すると、本で見る風景と同じものが、現場ではなかなか撮れないことが多々あるのを感じます。

著者が、その場所の魅力を引き出すために、とんでもない位置から撮影したり、季節を変えたり、広角レンズで撮った

り…色々な工夫をしているのを感じます。そこには、著作者のその川に対する愛情や、並々ならぬ熱意を強く感じるので

本を見て「良くこういう写真を撮ったなあ…」と感じるたびに、「満潮を示している写真ならなんでもいい…」というような「やつつけ仕事」にならないよう、多くの写真を撮り直し始めています。

さて、「呑川」が「感潮河川」であることを知るためには、池上の「養源寺橋」付近はとても判りやすい場所です。ただ、「感潮限界」を知るには「潮」の移動を追いかける必要があります。



「大潮」のこの日、「久崎橋」から下流を眺めました。まだ潮は引いていて、両岸の「犬走り」が露出しています。（「久崎橋」は、2 国の「池上橋」のすぐ下流側、「松井病院」のそばにあります。）



やがて「満潮」近くになると、潮がやって来て「犬走り」を覆い始めました。



ここは「二国」(第二京浜国道)の「池上橋」直下です。「満潮」の時はこの付近まで潮が上がってくるはずですが。大きな岩は、まだほとんど露出しています。剥がれた2枚のスレートも、干潮時には水から出ています。

やがて「満潮」の時間帯になると・・・



2枚のスレートはすっかり水没し、大きな岩も上面だけが水面上から顔を出すだけになりました。カメさんが、濡れていない岩の上でのんびりしています。

たしかに「満潮」時には「池上橋」まで、潮が上がってきました。



今まで「池上橋」迄が、潮が上がる「感潮限界」で、「二国」を超え、「池上橋」より上流側は、潮の干満の影響を受けない領域と考えられてきました。たしかに通常は、いつ見ても変わらぬ「流れ幅」で流れているように見えます。ところが、この「大潮」の時には・・・



私が見ている前で、潮はどんどん「池上橋」を越え、呑川の中央を流れていた水は、川幅いっぱい広がったのです。まさに、あっという間に潮は押し寄せたのです。（向こうに見える橋が「池上橋」です。）



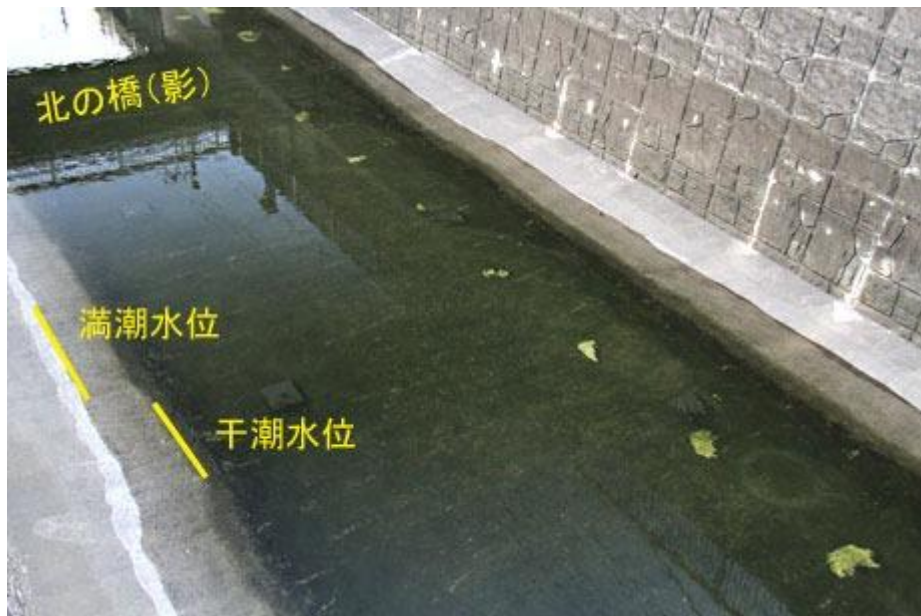
「池上橋」と「北の橋」のほぼ中間にあるこのスレートも、いつもは水に触れることはありません。



ところが「満潮」の今は、水がこのスレートに、触れるところまでやって来ました。



上流側を見ると、向こうに見える橋は「北の橋」ですが、その付近まで水が広がっています。



「北の橋」直下を見てみましょう。干潮時の水位に比べ、明らかに満潮時は水が広がり、潮は「池上橋」どころか、次の上流の橋「北の橋」を越えるところまでやって来ているのです。

こうして、「大潮」の時は「池上橋」まで潮が上がってくるのではなく、「北の橋」を越えるところまで上がってくるのです。つまり「感潮域」は「池上橋」迄で無く、「北の橋」ぐらい迄なのが明らかになりました。こうして、どこかの誰かが言っていることに頼らず、現場で確認すると、新しい事実が浮かび上がったのです。

ですから、これからも「・・・と、言われている」「文献ではこう書かれている・・・」と言うことに頼らず、出来るだけ一つ一つていねいに、現場で確認する作業を続けたいと思っています。

そして、他の文献にどう書かれていようが、「呑川の会」の発行する「新版・呑川は流れる」にだけは、実際に見て確認した正しい情報が載せられている・・・という信頼度の高い冊子が出来ればと思います。

もう一つ、私が気になっていることに「断片的な呑川の知識を覚える”物知り博士”」になるための本にしたくないと思っています。とりわけ、大人も含めて子どもたちが、断片的な「物知り博士」になっている様子に、日本の将来への危機感を感じています。「感潮領域」が、「池上橋」であるとか「北の橋」であるというような「断片的な知識」を覚えることに、なにか意味があるのでしょうか・・・それは「きみ、よくそんなことを知っているね」「すごいね」「物知り博士だね」などと、言われることはうれしいでしょうが、それ以上の意味は無いと思います。それよりも「感潮領域」を知ることは、大切な意味が含まれています。

1)「呑川」のかなりの大部分、2/3 の領域が「潮の満ち干」の影響を受ける「感潮河川」であること。

「河口」から「北の橋」までは約 6km です。呑川の長さは約 9.4km ですから、なんと 2/3 が「感潮領域」なのです。呑川は、潮の満ち干を抜いて語ることは出来ないのです。

2) 呑川は「感潮河川」であり、「感潮限界」があることの意味。

呑川が「感潮河川」であることは、海の生きもの(魚やカニなど)がたくさんやって来る大きな要因になっています。そしてそれが、カワセミやコサギ、カウウなどたくさんの野鳥を惹き寄せているのです。

そして、この環境が「アユ」さえも遡上させているのです。

「呑川」のとなり「内川」があり、これも「感潮河川」です。でも「内川」は「全域」が感潮河川であり、海水で満たされています。「呑川」のように「北の橋」までが「感潮限界」で、その上流側は「淡水」という環境ではありません。「呑川」に「感潮限界」があると言うことが、また多くの魚を遡上させているのです。「アユ」の生活史の中で、いっぺんは「汽水域」か「淡水域」に遡上することが必要なのです。そのことが、「淡水域」の無い「内川」には「アユ」が遡上せず、「多摩川」や「呑川」に「アユ」が遡上する理由なのです。こういう種類の魚はとて多くいるのです。

3) 全ての川が「感潮河川」では無いこと。

たとえば、すぐれた河川環境で有名な「善福寺川」は、「感潮河川」ではありません。「善福寺川」は「神田川」につながっていますが、「神田川」の「感潮領域」はもっと下流に位置しています。実は、都内の多くの川は「感潮河川」では無く「呑川」が「感潮河川」であることは、とても素晴らしいことの一つであることを認識する必要があります。

こんな風に、「呑川の感潮域は”北の橋”まで」等という「断片的な知識」だけでなく、それが持つ意味を深く知ることが大切だと思います。そして「新版・呑川は流れる」には、そんなことがキチンと書かれている・新しい視点が与えられる・という冊子に出来ればと思います。

ただ、この2年程度で、どこまで内容を深められるか・頑張らなければならないのは承知していても、少し不安を感じています。

(当面の日程)

2014/8 月いっぱいまで「西蒲田地域悪臭ヒヤリング行動」

2014/7/24(木)「呑川の会・定例会」9:30 洗足池図書館・多目的室

2014/7/24(木) 雪小「わくわくスクール」13:15 雪小

2014/7/29(火)「東京都の川を考えるシンポジウム」13:30 都民ホール

2014/8/1(金) 洗足池図書館「呑川講座」大田区報掲載・募集開始

2014/8/9(土)「呑川の会・定例会」13:30 蒲田小学校

2014/8/20(水)「呑川ネット・定例会」10:00 生活センター・講座室

2014/9/13(土) 洗足池図書館「呑川講座」第1回スタート(連続5回講座)

——photo essay by——

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町 1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
